

# 会計を通して『カテゴリー』について考える

—「カテゴリー」・「スキーマ」・「エートス」—

大 西 新 吾

(2005年1月14日受理)

## 1. はじめに

本来的な会計の認識（により生まれた）構造はグラフ理論でいう「グラフ」（立体的というよりも位相幾何学的図形）に近いものである。会計の基本的記号である「勘定」間の〈関係〉の考察を、グラフ理論を援用して進めていけば、記号間の〈関係〉がより明瞭に整理され、認識の根源に近づくことができる。

「勘定」間の〈関係〉の《根拠》にまで踏み込んで考えようとした場合、2点間の関係には無限のつながりの可能性があるとするのではなく、その関係は限られており、その関係の「種類」はグラフで考えたさいの「本数」から推察される。複雑そうに見える関係は、ある限られた結合関係の連鎖にすぎない。この限られた関係を生み出している素を論者はこれまで“semantic primitive”とみて、『カテゴリー』と呼んできた。それは「人間の内側にある認識の枠」のようなものである。われわれが、会計として、《経済事象》・《財》の変動を写し取る（写像）にしても、コトバとして「経済事象」・「財」を構成する（築像）にしても、そこには人間の内側にある『ナチュラ（インネイト）・カテゴリー』が関与しているとみる。したがって、論者は、ポール・ロワイヤルの言語観にも、ソシュールの言語観にも立脚しない。しいていえば、パースの記号観ないし後期イェルムスレウの記号観に近い立場にある。

本稿には、会計の認識の根源には（換言すると、われわれが会計としてある判断をする根底には）、なんらかの『カテゴリー』性がある、という問題

意識がある。『カテゴリー』という用語はこれまでさまざまな領域で使用され、さまざまに解釈されてきたことば（概念）であるが、論者がとらえる「人間の内側にある認識の枠」のような解釈は、認知言語学における「スキーマ」、社会学・経済（人類）学における「エートス」に相通じるところがある。本稿では、認知言語学的視点および社会学・経済（人類）学的視点から、『カテゴリー』について再考してみたい。

## 2. 認知言語学的視点

### 2-1. 基本的用語の確認

認知言語学的視点から『カテゴリー』を考えるにあたり、まずは「カテゴリー」、「スキーマ」、「フレーム」といった認知言語学の用語を確認しておこう。

認知言語学では、さまざまなものをひとまとめにしてとらえる心のはたらきをカテゴリー化(categorization)と呼んでいる。そして、ひとまとめになったものを「カテゴリー(category)」という。カテゴリーの中の代表的な事例（＝成員）を「プロトタイプ(prototype)」という。それは、カテゴリーを代表する好例であり、分かりやすい例でもある。そのカテゴリーは、プロトタイプを中心にさまざまな事例が放射状に配置された構造をもっている。

古典的なカテゴリー観(classical view of category)によると、カテゴリーの定義は、その成員が当該カテゴリーに所属するかしないかを明確に決定できる、とするものであった。すべての成員に共通する必要・十分条件的な定義が可能で

あって、あらゆる成員が等価的(equivalent)に問題となるカテゴリーに属するという考え方である。換言すると、カテゴリーの定義に「それらしさの程度」をもち込まないやり方が古典的なカテゴリー観である。認知言語学における「カテゴリー」は、ウィトゲンシュタインの家族的類似性という考え方に近く、日常生活で経験する大半のカテゴリーは、基本的には、「それらしさの程度」において特徴づけられる対象だと考えられる。

カテゴリーの成員間には類似属性のネットワークがある。カテゴリーの全成員に共通して想定される抽象的な理想像のことを「スキーマ(schema)」という。理想像であるから、プロトタイプ(属性)や周辺事例(属性)といった個別の事例や属性とは性質が異なる。スキーマは、いわば人間の思考のお手本となるような発想の「鋳型」である。そして、人間が身体を介して環境世界と相互作用する経験から繰り返し現れ、抽出される図式のことをとくにイメージ・スキーマという。

認知言語学には、フレームという考え方がある。人間は主体的に対象を概念化しているが、概念化とは、これまで言語外知識とされてきた百科事典的知識や信念、視点、コンテキストなどを取り込んで、対象に意味を与えることでもある。「フレーム(frame)」とは、百科事典的知識のようなある概念を理解するのに前提となるような知識構造のことである。われわれ人間は、フレーム知識を背景に対象を概念化、つまり意味づけをする主体だということになる。

## 2-2. 「スキーマ」

ではここで、論者のいう人間の内側にある認識の枠としての『カテゴリー』に近い概念と思われる認知言語学の「スキーマ」を通して、会計言語をみてみたい。

認知言語学によれば、われわれは、出来事をとらえるとき、大きく異なる二つのスキーマにしたがってとらえている。ひとつは、出来事に参加する人間や物、すなわち参与者(participant)が意図とはたらきかけをもつ場合であり、もうひとつは、意図もはたらきかけももたないような場合である。前者のようなとらえ方は他動性(transitivity)が高い、後者のような場合は低いという。前者には、意図をもち、はたらきかけを行なう動作主(agent)が存在する。

さまざまな表現を観察すると、(A)「人間－動作－対象」、(B)「対象－動作」、(C)「人間－動作」の三つの型に大別できる。これらは物のとらえ方の基本型なのでいずれもスキーマとみなすことができる。

事態のスキーマの例を見てみよう(図1)[吉村、66頁]。

ここで、たとえば「子供がボールを転がした(The child rolled the ball.)」といえは、「人間(子供)－動作(転がす)－対象(ボール)」という(A)型になる。「ボールが転がった(The ball rolled.)」といえは「対象(ボール)－動作(転がる)」の型になる(B型)。前者の表現型「子供がボールを転がした」であれば、子供(参与者)には(ボール<参与者>を転がそうとした)意図と、(ボールに対する)はたらきかけがあり、「子供」は動作の主体、つまり動作主ということになる。一方、「ボールが転がった」では、ボール(参与者)には意図とはたらきかけがない。したがって、この場合の「ボール」は動作主ではなく、対象(object)と呼ぶ。前者のような表現はスキーマ(A)のプロトタイプであると同時に、言語カテゴリーである他動詞文(transitive sentence)の一事例でもある。一方、後者のような表現はスキーマ(B)のプロトタイプであると同時に、言語カテ

<スキーマ>	<言語カテゴリー>	<事例(プロトタイプ)>
(A)「人間－動作－対象」…他動詞文		(例) The child rolled the ball.
(B)「対象－動作」……………自動詞文		(例) The ball rolled.
(C)「人間－動作」……………自動詞文		(例) The child ran.

図-1

<スキーマ>	<言語カテゴリー>	<事例（プロトタイプ）>
(A)「人間－動作－対象」	…商品売買取引	(例)「現金」－「売上」－「商品」 「商品」－「仕入」－「現金」
(B)「対象－動作」	……………減価取引	(例)「減価償却費」－「備品」
(C)「人間－動作」	……………金銭貸借取引	(例)「現金」－「借入金」、「貸付金」－「現金」

図-2

グリーンである自動詞文(intransitive sentence)の一事例でもある。さらに、(C)型のような自動詞文もあって、たとえばThe child ranといえ、childは動作主であるが、はたらきかける対象がない。これはスキーマ(C)のプロトタイプで、言語カテゴリーでいえば、やはり自動詞文の一事例である。

このような認知言語学の考え方を参考にして、会計言語について考えてみる。会計における<意味のまとまり>としてのさまざまな取引(グラフ)をここでの<言語カテゴリー>に位置づけ、各取引の中で典型的なものを考える取引の具体的な事例をここでの<プロトタイプ>と位置づけて考えてみる。先の事態のスキーマの例にあてはめてみよう(図2)。

ここで、論者は「言語カテゴリー」を<意味のまとまり>とみているが、これはグラフ理論という「グラフ」にあたるものである。そのグラフの典型例としてのプロトタイプを考えているので、ここでの事例はいわゆる「仕訳文」そのものではないことに留意したい。すなわち、「会計は幾何(グラフ)の代数的表現(行列化)」といった場合の代数的表現が「仕訳文」であり、ここでの事例(プロトタイプ)とは代数的操作がなされる以前のものである。また、ここでの人間は動作主であるが、「ヒト」は「現金」の上にあるものとして、「ヒト」という表示は省略した。

会計の言語表現が、この三つの型に類別できるかどうかはもっとたくさんの事例を検討してみる必要があるが、この検討を通じて<スキーマ>がより整理されていくことになると思われる。すなわち、認識の型が見えてくる可能性がある。

ところで、「人間－動作－対象」など、文の組み立ては一定の型(pattern)にしている。

つまり、語が一定の並べ方にしただけで文というひとつのまとまった単位を作る。このときの文としてのまとまりをつくる型のことを構文(construction)と呼んでいる。構文は、文レベルにおいて、その「かたち」と「意味」の結びつきから生じてきた概念である。たとえば、英語の受身構文は、“be + 動詞の過去分詞 + by～”という「かたち」で、受身という「意味」を表している。このように認知言語学では、かたちと意味の結びつきを重視している[吉村、78頁]。

ここでの「意味」とは、ことばの足し算を超えた知識(フレーム知識、百科事典的知識、前提知識)に支えられ、対象や事態を主体的に概念化したものである。まとまりや全体の意味が、個別の要素の足し算した意味と異なるといった考え方は、知覚心理学の一派であるゲシュタルト(gestalt)心理学に基づいている。ゲシュタルト心理学は、認知で大切な点は、知覚上のまとまりであると主張する。認知言語学では、ことばの「かたち」は「意味」の「象徴単位(symbolic unit)」であるとみなす。語のまとまりである構文も、ことばのかたちのひとつであるから、意味の象徴的単位としてとらえることが可能である[吉村、81頁]。

こうした「かたち」と「意味」という構文文法の視点からも、<意味のまとまり>に注目した会計言語の考察は重要である。すなわち、“semantic primitive”の究明にあつては、表現されたものの「かたち」の背後にある<意味のまとまり>を整理することで、そのさらに背後にある『カテゴリー』に迫ることが可能と思われる。論者がこれまでの研究において、仕訳文という「かたち」の背後にある<意味のまとまり>を整理するために数学のグラフ理論を援用した理由は

ここにある。

## 2-3. 文 法 化

認知言語学から会計を通して『カテゴリー』がどのように探れるかを考えるにあたり、「文法化」ということにふれておきたい。ことばの意味が薄くなって文法的な性質だけが残る現象を「文法化(grammaticalization)」と呼び、意味が薄くなることを(意味の)漂白化と呼んでいる。一般に、ことばには内容語(content word)と機能語(function word)がある。内容語とは、名詞、動詞、形容詞など、中身のある対象、行為、属性、様態などを表す。つまり、内容語とは、中身のある語のあつまりに付けられたカテゴリー名である。機能語は内容語にくっついて文法関係を表したり(「が」「を」「に」、in, on, at, over)、文と文を接続したり(「ので」「から」「しかし」、語形を変えて単語を大きくすることばの単位(一さ「明るさ」、一的「民主的」、おー「おビール」、un-happi-ness, thought-full-ness)などを指す。品詞で言えば、格助詞(「が」「を」など)、前置詞(in, onなど)、接続詞(「ので」「から」など)、接辞(「明るさ」の「さ」など)がこれにあたる。つまり、機能語は、中身のない語のあつまりに付けられたカテゴリー名である。したがって、文法化というのは、本来、内容語であったものが、時間がたつにつれて、機能語の性質、つまり、意味が薄くなって、文法的なはたらきだけを帯びてくる現象のことをいう[吉村、134-135頁]。会計のいくつかの歴史書における「借方」・「貸方」という用語の説明からも推察されるように、「借方」・「貸方」という用語は、ここでの機能語にあたると思われる。

内容語が機能語に変化する文法化は、「内容語→機能語」の順序で進行するとされる。一般に、科学技術などの文明の発達や文化の変容にともなう、内容語は増えていく可能性がある。ところが、機能語のほうは簡単には増えない。かりに新しい格助詞が出てきたとしたら言語的にたいへんなことで、新しい文法関係を作るようなルールが生まれたことを意味する[吉村、137頁]。これは大変興味深いことで、会計においても、「借方」・

「貸方」に代わる新しい機能語が出てきたら、新しい文法関係を作るようなルールが生まれることになる。仕訳というルールに代わるものが生まれることによって、会計全体が大きく変わることが予想される。

## 3. 社会学的・経済(人類)学的視点

### 3-1. 社会学的視点

では今度は、「複式簿記」というシステムから何が生み出されているか、ではなく、「複式簿記」とは何であるか、でもなく、「複式簿記」というシステムの近くにあつてわれわれの認識をつくりあげているもの、を探っていこう。

19世紀におけるドイツの国民経済学者W. ゾンバルト(Sombart, W.)は、その著において、「おおよそ、資本主義というものは複式簿記をぬきにして考えることができない。複式簿記と資本主義とは形式と内容のように相互の関係にある。資本主義そのものが、その力を働かすための道具として複式簿記を造り出したのか、それとも複式簿記がはじめにその精神から資本主義を生み出したのか、いずれとも判断することができないほどである。」といっている。ここで、「複式簿記の精神」とは何かはっきりしないのだが、ゾンバルトは、利潤の追求を目的とした活動があつて追求して得た結果としての利潤の算定のために複式簿記が生まれたというよりも、複式簿記という記録・計算システムがあつたからこそ利潤の追求を目的とした活動が行いえた可能性がある、と主張している。

通常の間考え方では、まず商業が発達し、そして、その商業やその担い手である商人たちを内面から動かしている営利精神、営利原理というものが社会の到るところへしだいに浸透していくと、その結果として近代の資本主義が生まれることになるのだ、とされる。上述のゾンバルトの間考え方は、営利精神、営利原理は複式簿記があつてはじめて開花するとしたうえで、基本的にはこの考え方の流れの中にある。それは、貨幣欲に突き動かされた商人たちが、次第に生産を把握して産業経営者となり、それに抵抗しつつも没落していった小生産者たちは労働者になっていく。そのうち産業生

産者になった人々を動かしている貨幣獲得欲こそが「資本主義の精神」なのだ、との考えのもとにある。

マックス・ウェーバー(M. Weber)は、近代の資本主義は経営的資本主義、とりわけ産業経営的資本主義であるとしたうえで、その近代の資本主義は複式簿記を土台として営まれる合理的な産業経営、その上に築かれていく利潤追求の営み、という明確な特徴をもっているとみる。しかしながらここで注意しなければならないことは、ウェーバーは「利潤の追求」の是認が近代資本主義を形成していったとは決して述べていない点である。そうではなくて、近代資本主義の発展は、利潤追求の営みとして成り立っている資本主義からその利潤追求を除いてしまえばおよそ意味をなさなくなるのに、利潤追求に反対する経済思想が公然と支配していたようなところでなければ、近代の資本主義は生まれなかった、といっているのである。ここでは複式簿記の存在が近代資本主義の成立に無関係であったとは述べていないが、そのほかに(それ以上に)、合理的経営体に適合的な経済的人間的な関係をつくり出すことができた「エートス」——なによりも経営という社会関係に適合的な人間類型を生み出していくことができたような「資本主義の精神」——が必要であったとしている。

ここで、利潤追求に反対するような経済思想の根源は、ウェーバーの考察においては宗教的な倫理観に帰されるわけであるが、論者が問題としたのは、こういった倫理観は人間の内側にある認識の型と何らかの関連性があるかという点である。とくに、会計を通して考えようとした場合には、一見すると関係がないような数字「ゼロ」に注目した見方もある。

ブライアン・ロトマンによると、「ゼロとして知られる数学的記号がヨーロッパ的意識へ入るにあたっては困難や無理解があった。ゼロは、千三百年ほど前のインド中部で、今日親しまれているインド数字系のなかに弁別性要素として誕生していたらしい。そこからアラビア商人の手で活発に伝え広められ、十世紀にはアラビア人支配下の地中海沿岸全域で広く使用されていた。十世紀から十三世紀にかけ記号がアラビア圏内に留まったの

はキリスト教ヨーロッパ世界から抵抗を受け、数を扱うことを職能としていた人々によって得体の知れぬ不要な象徴として片づけられていたためである。」「十四世紀になると北イタリアに商業資本主義が出現し、数を扱うことが、教会で教育を受けたラテン語漬けの聖職者たちから地域言語で教育を受けた商人、工人科学者、建築家たちの手に渡り、算術は彼らにとって交易や技芸の基礎必須科目となった。その結果、アラビア数学の導入、わけでもインド数字のそれを長きにわたって提唱し続けてきた人々、たとえば、1202年に『算盤の書』(Liber Abaci)を著したフィボナッチらの文献が次第に影響力を持ち始めた。複式簿記(差引ゼロ原理)の占める中心的役割や資本主義の計算的要請は、ゼロという「異端の象徴」に対し熾り続けていた抵抗を一掃し、十七世紀初頭までに、インド数字が、数を記録したり、操作したりするさいの支配的モードとして、ヨーロッパ中でローマ数字へ完全にとって代ることを保証したというわけである。」[ブライアン・ロトマン、16頁]。

青柳文司教授によれば、「8世紀にインドで生まれたゼロは、がんらい、「不在」(1、2、3、……、9が不在)という構文論的な概念であったが、やがて「無」という意味論的な概念になった。キリスト教は「空虚」を否認する古典的ギリシャ思想に加担して、宇宙が「無」から創造されたとする創世記と相容れなかった。そのため、10世紀から13世紀にかけてゼロはアラビア商人の手でインドからアラビア文化圏に伝えられたが、キリスト教のヨーロッパ世界からは得体の知れない不要な象徴として抵抗された。この事態を解消したのが、ロトマンによれば、簿記の勘定記号であった。」ということである[青柳、152-153頁]。倫理観の背後には、人間が「数えること」、「有と無」ということが関係していると思われる。

### 3-2. 経済(人類)学的視点

人間の経済的な活動が自己の家族や支配階級のためのものであることをやめ、「商品」生産に転化したことから「経済学」が成立していったとみる見方がある。商品の分析、すなわち市民社会とくに資本主義経済の分析が、アダム・スミスやカ

ール・マルクスによって科学的に行われることをもって、経済学が成立し、発展していったとの見方である。これに対し、モースの贈与論をよりどころとしてカール・ポランニーらが展開した経済人類学的視点によれば、「商品」の交換以前に、非市場社会、原始社会における「贈与」が経済（のみならず人間の社会）の根底にあるとの見方がある。

カール・ポランニーの経済人類学は、非市場社会経済の考察を経て、市場経済の特殊性を指摘するものである。その要点は、市場経済においては通常財のみならず労働、土地、貨幣さえもが価格という形で計量化すなわち分節化、言語化され、商品として市場で売買されるという事実にある[大和雅之、222頁]。会計学的に言えば、『モノ（貨幣や労働を含む）』ではなく「価格」というコトバを売買している、ということになる。

「複式簿記」以前には、価格という名のもとでの分節化・計量化が行なわれる以前の世界がある。すなわち、複式簿記によって分節化される以前の、人間と環境とが相互作用をおこすところの原初的な世界がある。そこには、人間社会の一部としての経済システム（非市場社会）があり、今日のように経済システム（市場経済）が人間社会のシステム全体を覆い尽くそうとする事態が生じる前の形態がある。「複式簿記」から遡ることによって、人間の内側にある『カテゴリー』を見つけて出すことができるかもしれない。

ここで、モースの贈与論について簡単にふれておこう。モースは「贈与論」において、「交換」の儀礼的性格を明らかにした。「パプア人とメラネシア人は、買うことと売ること、貸すことと借りることを指す言葉をたった一つしか持たない。」モースはこの事実をもとに「交換」を「全体的社会的現象」(phénomènes sociaux totales)とみる。そして「贈り物(財)を与える義務」(提供)・「贈り物(財)を受け取る義務」(受容)・「返礼する義務」(返礼)の三つの義務を交換体系における一セットとみて、これを「全体的給付組織」(système des prestations totales)と呼ぶ。この全体的給付は、功利主義的あるいは機能主義的な交換ではない。モースは交換を社会的分業の

結果と見る代わりに、社会の原初的現象と考え、逆に分業を交換の関数とみなしたわけである。ここでは経済のみならず政治も倫理も芸術さえもが「全体的社会事実」としてとらえられ、それらを根底で動かす原理として贈与体系があることになる[上野千鶴子、99頁]。そしてこの贈与形態にこそ、人間の認識の型をみる手がかりがありそうである。そこには、人間(社会)の『代謝』の仕組みがセットとなって現れているように思う。

#### 4. 『カテゴリー』

モースは社会科学の方法、手段、ならびに究極の目的を次のように述べている[M.モース、「付録—討論の結論の要約—」『社会学と人類学Ⅱ』41頁]。

「なによりもまず、諸々のカテゴリーについて可能なかぎり完備した目録を作成しなければならない。人間が使用したと認知することのできる一切のカテゴリーから出発しなければならない。そうすれば、理性の天空には、なお多くの光なき月、あるいは光弱き月、あるいはもうろうとした月が存在したし、またいまもなお存在することがわかるであろう。」

ここでの「カテゴリー」とは世界の切り分け方、認識の型のことである。モースは明らかに「カテゴリーの周期律表」の存在の可能性を示唆している。

西田幾多郎にとって、「場所」とは人間の意識のフィールドである。自己が自己を考えると、自己もその一部として包摂されるような非自己の広がりの中に自己を映している。ところが、その自己と自己を映している非自己とを丸ごと映している非自己の広がりがある。こうして限りなく遡及していく先に、西田の考えた「場所」がある。「無にして自己の中に無限に自己を映す場所」である。この西田の「場所」とモースの「全体的社会的事実」には相通じるものがあると思われる。モースは個体と社会の交差する「場」に関心を抱いていた。判断は、自己を超えた場所でなされる。したがって判断の主体は私ではなく、場

所である。

人間の内側にある『カテゴリー』は西田のいう「場所」でもある。

これまでの考察を振り返るかたちで、会計学との関わり合いを考慮しながら『カテゴリー』について述べていくことにする。

論者は以前、「会計は、幾何（グラフ）の代数的表現（行列化）によって構成される。そしてグラフから行列への変換システムを複式簿記という。」と述べたことがある。ここでいう代数化を行なう以前のグラフ（意味のまとまり）が論者のいうところの『カテゴリー』ではない<sup>1)</sup>。この「意味のまとまり（トポロジ的グラフ）」は認知言語学でいう「カテゴリー」に当たる。論者のいう「人間の内側にある認識の枠（型）」としての『カテゴリー』は、グラフのさらに以前にある。それは身体性を重視する認知言語学における「スキーマ」という概念に近い<sup>2)</sup>。

先に見たように、マックス・ウェーバーは、複式簿記を資本主義の土台となるものとみなしながらも、複式簿記以前のその背景となる人間の精神—「エートス」—に注目する。このことは、かりに複式簿記システムが会計の認識の中心ではあったとしても、それがすべての始点（根源）ではないということが読み取れる。システムの根源には人間という主体があり、人間を捨象してのシステム（客観）はありえないということである。

グローバル・スタンダードという名のもとに会計基準の一元化が推し進められているが、アメリカ会計基準や国際会計基準は＜概念フレームワーク＞なるものを設定し、それをもとに理論武装を試みる。そのさいの＜概念フレームワーク＞は認知言語学でいう「フレーム」とは異なる。また、この＜概念フレームワーク＞は、人間の内側にある認識の枠（型）としての『カテゴリー』でもない。

人間（『カテゴリー』）と経済社会という外界（環境）が、百科事典的な場としての「フレーム」のもとで、複式簿記システムを用いて会計の表現が展開されていく。そしてこれにより対象が構成される。ここでいう対象は外界（環境）そのもの

ではないが、構成された対象が外界（環境）をアフォードすることもある。すなわち、人間と外界との相互作用の結果生まれた表現体もまた人間と環境に影響を与えていくわけである。もし、会計に＜概念フレームワーク＞が必要であるならば、こうした意味での＜概念フレームワーク＞が求められる<sup>3)</sup>。

こうして人間と環境の相互作用の中から、会計としての認識は「勘定」およびその＜関係＞として発現されている。したがって、表現された記号としての「勘定」間の＜関係＞を考察することにより、アブダクション推論を通して認識の型としての『カテゴリー』を見出すことを論者はこれまでのいくつかの論文の中で試みてきた。

ところで、「勘定」間の＜関係＞を考えることは、実は、言語相対説という言語記号観を認めるか否かということに深くかかわっている。認知言語学は文化相対主義に理解を示す言語観をもっている。言語を考えると文化に根ざした経験の質に大きな関心をもっており、言語は当該文化を母体にした経験の相違を反映するひとつの資材とみなされる。ただし、言語には普遍主義的な一面があることは否定できない。それは、人間に特有な認知能力を問題にする限り、人間に共通したことばの特性も存在すると思われるからである。すなわち、感覚器官を含めた身体基盤が同じである限り、文化の違いを超えたことばの同質性が認められる可能性はある。相対主義か普遍主義かといった排他的な考え方には無理があると思われる。したがって、チョムスキーにはじまる生成文法の考え方（人間は生まれながらにしてどの言語の獲得にも対応できる普遍文法が備わっている）のみで言語理論を組み立てることに無理がある<sup>4)</sup>。

ここでの言語観を「会計観」に置き換えて考えてみると、会計言語観（あるいは会計記号観）には大きく二つの考え方があることが分かる<sup>5)</sup>。ひとつは、普遍主義学派とも呼べるもので、チョムスキー流の生成文法（普遍文法）を認める立場に立って会計言語論を展開するものである。その代表的なものとして、わが国では田中茂次教授の見解があげられる。

もうひとつは、相対主義学派とも呼べるもので、



言語と文化の相互の関わり合いを認める立場にある会計言語観である。その代表的なものとして、井尻雄士教授の見解があげられる。井尻は、言語相対説を支持する立場にあると思われる。それは次の言からもわかる<sup>6)</sup>。

「……数学のもつ豊富な概念やそれを表す単語をもとにしてそれを実在の現象に類推することによって、現象のなかの新しい要素や規則性をみつけ出すことが多い。……実在の現象が数学のモデルに翻訳されるのみならず、数学のモデルが実在の現象に翻訳されるという面も重要になる。……同じことがビジネスにおける会計の役割についてもいえる。あたかも文化が言語に影響しまた言語によって影響されるように、ビジネスは会計に影響し、また会計によって影響される。」[井尻雄士、223頁]

強弱は別として、言語観として言語相対説を認める（否定しない）立場に立てば、人間の内側にある認識の枠としての『カテゴリー』にも、地域、文化、時代、そしてそこで使用される「言語」の相違によりいくつかの型があるとの見方ができる。誤解を恐れずにもう少し具体的に言うならば、認識それ自体はアニメのような単純な絵にすぎないのだけれども、それを文にする、記号にするには、記号列の「鑄型」に入れる必要がある。心が、「これは（この認識は）どんな鑄型にはいるかな」と判断するわけである。そのさい、環境が異なることによって、その環境と相互作用をもつ人間の内にある「鑄型」にも相違があるのではないかということである。ここではその断定は避ける。

では、あらためて問う。会計を通して見えてくる「人間の内側にある認識の型」としての『カテゴリー』とは何か。それは非常に単純なものではなからうか。会計の記号表現としての「勘定」間の〈関係〉の考察から見えてくることは、結局は、すべての「勘定」の背後には人間があるということである。ただし、その人間が立つ場所（視点）が地域や文化や時代等によって異なり、人間が外界（環境）を観察する時空の相違により、その結果、

記号が環境に与える意味づけが、意味関連ネットワークが異なってくる。そうした意味現象の奥には、人間の内側にある認識の型があって、それが世界を切り分けていく。

会計は〈数〉概念を基礎に成立していることは否定できないであろう。あらゆる物と物の間の関係を数の関係に置き換えて、「会計測定の基礎」論を展開したのは井尻雄士教授であるが、井尻にあってはそれは分類的複式簿記と因果的複式簿記との対立として語られている。〈数〉概念を「分類」して複式簿記を語るか、それとも〈数〉概念の間の「因果」関係を重視して複式簿記を語るかであるが、この設定の仕方の是非はここでは問わないとして、井尻は複式簿記というシステムに焦点を当てて考察を行なっている。そしてそのことが「測定」の基礎になるとしている。論者の問題としているところは複式簿記システムのもっと以前の『認識の型』である。といっても、会計は〈数〉概念を基礎に成立しているとする限り、会計を通して考える『カテゴリー』はやはり〈数〉概念を抜きにしては語れない。〈数〉概念の基礎にあるのは当たり前聞こえるであろうが、数えること、である。それは人間が自分の身体（とくに指）を使って、モノと自分の体を対応させることから始まっている。対応させることができないくらいモノが目の前にあるときは「いっぱいある」ということになり、数えることはそこで終わる。すなわち分節化をあきらめるわけである。これは「約束事」であり、文化の違いによってその「約束事」は相違することはあろうが、人間の生存にかかわることとして（たとえそれが単なる一個人の生存の問題ではなく、奪い合いによる生存の危機であろうが）、数えること、そのものはどの文化にも共通して生まれたと思われる。現代数学から見ると、〈数〉概念の基礎は「基数」と「序数」ということになるだろうが、「順序」を問うということは位置や時間的な流れを認知することであり、これにより〈数〉概念は展開の可能性が広がっていく<sup>7)</sup>。

こうして、会計の基礎には〈数〉概念があり、その展開の途中から評価や測定といった問題がこれもやはり人間と環境との相互作用によって生じ



てきたわけである。ここで、断っておかなければならないが、＜数＞概念に注目することは、算術、代数のみに焦点をあてることにはならないということである。確かに先に、機能語としての「借方」・「貸方」に注目したが、機能語は内容語から意味が薄くなって文法的なはたらきを帯びたものであり、もともとは内容語（の一部）であったはずのものである。問題とすべきは、意味が薄くなる前の、つまり意味という中身がある内容語としての＜意味のまとまり＞のほうである。それは数学の世界でいえば、意味をまとまりとしてとらえるグラフ理論の世界である。すなわち、『カテゴリー』の発現としての＜意味のまとまり＞があり、それは諸「勘定」とそれらの＜関係＞により成り（グラフ理論でいうと点と線の関係）、それが代数化として「仕訳」を通じて表現されていく。一見すると、会計は「仕訳」という文法を始点として、それ以降は一連の操作として法制（法規）の力を借りながら試算表や財務諸表が作成されていくように思える。しかし、＜意味のまとまり＞という観点からすると、試算表という概念集合体（に近いもの）がグラフとしての出発点として（折り紙が折られていくことによって様々な形が生まれるように）展開されるかたちを整理したものが、「仕訳」という文法としてとらえられているのではなかろうか<sup>8)</sup>。それは空間認知という視点から述べると、0次元（点）、1次元（線）・2次元（面）、3次元（立体）に分けて考えることができるのではないと思われる。ここで0次元とは、パースの記号論で言うところの第一次性の概念に近いものであり、可能性としての存在である。「有」（点）を立証するための「無」（－）であり、＜－→点＞、＜点＞、＜点→－＞、＜－→点→－＞のように展開する。ここで『カテゴリー』を語る上で重要なことは、認識の型は＜セット＞として現れるのではないかということである。

1次元においては＜－→線＞、＜線＞、＜線→－＞、＜－→線→－＞のように展開し、以下、2次元、3次元も同様に考える。ここで、点や線や面や立体は人間がいる場所であり、それは人間が環境と接触する仕方でもある。この見方は、先の西田幾多郎の「場所」や三浦梅園の『価原』の根

本思想に通底していると思われる。

イスラム圏において「利息禁止」という決まりごとがあるが、こういったことも人間と環境との関わり合いの表れのひとつとしてみる事が可能である。そしてこれにより会計表現としての「勘定」体系にも影響を与え、それがまた異文化との接触による衝突を通して、人間や社会という環境に影響を与える。国際的な会計基準の統一化を目指すのであればこのことを踏まえたものであってほしい。

このように人間の記録・計算行為としての会計の考察（とくに複式簿記にかかわる数学的・思想的考察）を行うことは、社会学や経済学に対し、会计学から新たな視点を提供することにもなるであろう。

## 5. おわりに

マルセル・モースの「カテゴリーの周期律表」という考え方は、会计学という学問領域を設定しその枠内で語りうるといったものではないが、少なくとも会计学の立場から『認識の型』としての『カテゴリー』を語ることが許されるのであれば、次のように考えられる。それは、表の形で整理することはその性質上難しいが、仮に周期律表のような形で表現されたとして、空間（地域、文化圏等）を横軸に、時間（時代等）を縦軸におきながらも固定されたものではなく、またカントのように人間から離れたものでもない。それはやはり人間の精神、身体性に基づく。それはおそらく生命に、生存にかかわるものであって、人間をひとつの＜器＞と考えることによって語りうるのかもしれない<sup>9)</sup>。それは認知言語学にあつては、＜容器＞、＜リンク＞、＜全体－部分＞、＜中心－周縁＞、＜起点－経路－到達点＞などのイメージ・スキーマとして提案されている[野村益寛、139頁]。これらの図式が経験を構造化し、抽象概念を形成する役割を果たすとみられる。

結論として。＜数＞概念を会計を通してみた場合には、人間の内側にある認識の枠（型）としての『カテゴリー』の本質には、非常に単純な図式でいうと、中国の易経における『陰陽』の組合せ

があると思われる。それは単純な二項対立の型ではない。ルカ・パチオリ、ライプニッツ、イエラムスレウ、そして三浦梅園も『カテゴリー』の本質について同じことをわれわれに語っているのではないだろうか。

最後に、金子勝「思想を語る経済学者の死」福井新聞、2004年7月26日、から、少々長いが若干要約して引用する。

「森嶋通夫という経済学者が問題にしたのは、資本主義を支える人間のエートスである。森嶋は、市場は自動機械のように動くのではなく、社会を作っている人間の道徳規範や生活態度に大きく左右されると考えた。彼はマックス・ウェーバーの宗教社会学を応用して、日本人のエートスを中国型とは異なる日本型儒教精神であると規定する。[……]。

いまの日本の経済学界は、米国の経済学を学びそれに従わなければ、「国際的」な経済学者にあらずといった雰囲気で覆われている。それは微分方程式やゲーム理論といった数学的ツールで埋め尽くされているので、一見複雑に見える。しかし森嶋のそれと比べると、その人間観はあまりに単純だ。それは、人間は個人の効用や利益を最大化しようと動くというものである。多くの経済学者は、この単純な人間観に立って、規制をなくして市場に任せて自己責任でやれ、あるいは人々の利己心を刺激するようなインセンティブ（誘因）を組み込んだ賃金制度にしる、といったもっともらしい政策提言を繰り返す。そして、それが「グローバル・スタンダード」なのだから、日本もまねしなければ置いてきぼりになってしまうと「脅迫」する。」

人間は、その生きる価値を守るために経済や社会を営んでいる。しかし、いまの会計学・経済学はその価値を壊している。だとすれば、今ある会計学・経済学の「常識」から疑う必要があるのではないか。論者にはそう思えてならない。

## 注

- 1) 「グラフ」を「表現された記号要素のあつまり」とみれば、そのグラフはコトバとしての離散的なものである。そうではなくて、たとえばグラフを人間との相互作用を行う環境としての「外界」とみれば、それは連続的なものとみることができる。ここでは、前者、すなわち、表現体としてのグラフを指している。
- 2) ただし、認知言語学の中には、すべての概念は<経験>を基盤にしている、とみる経験還元主義を基礎とする見方があるが、論者はすべての概念が経験に還元されるかについては現段階では懐疑的である。
- 3) IASBやFASBの<概念フレームワーク>は「資本市場」を会計で説明するための用語解説集といったものであって、知識構造と呼べるものでもない。それは、会計という「場」を設定するさいの枠として、複式簿記システムとともに（協力して）、人間と外界との間にあるものとしての「フレーム」とはなっていない。この<概念フレームワーク>には次のような疑問がある。すなわち、そもそも文化性、地域性、時代性といったものを無視して概念の統一化が可能なのであろうか。数的処理の側面しか考えていないのではないか。価値を扱うはずの会計が数的操作を重視するあまり、<数>という概念の文化的意味の相違を捨象してしまっているであろうか。論理実証主義の立場、プラグマティズムの立場を強調しすぎていないであろうか。
- 4) 言語は思考・価値観・美意識などの世界の見方とセットになって現れているとする考え方、すなわち言語と文化の相互のかかわりを認める立場が相対主義者（relativist）の言語観である。反対に、諸言語は文化の異動から自律して存在し、一定不変の特徴から成る完結体であるとする考え方が普遍主義者（universalist）の言語観である。相対主義的な言語観で有名な学説としてサピア＝ウォーフの仮説（Sapir-Whorf hypothesis）がある。この仮説の中でも強い仮説（言語決定論）と弱い仮説がある。
- 5) 誤解を恐れずに、分類を行わず会計言語観を列記すれば、わが国においては次のようなものがある。論理実証主義者カルナップの見解に依拠し、コンピュータ言語（コボル等）の視点から集合論を中心にした会計構造論を展開し、意味は構造とは別のところから付与できると考え、会計基準の世界的統一化を推し進める斉藤静樹教授の会計言語観。ソシール言語観に依拠する全在紋教授の会計言語観。同じく基本的にはソシール言語観に依拠しながら、構築主義の立場から社会言語学的考察を行なう永野則雄教授の言語観。ウィトゲンシュタインの家族的類似性の考えを会計観の中心にする岡本治雄教授や伊崎義憲教授の会計言語観。非常にスケールの大きい視点から、チョムスキー流の普遍主義も相対主義もボール・ロワイヤル文法観も包み込む青柳文司教授の会計言語観。パス流の記号観をもとにした認知言語学的視点を有する笠井昭次教授や杉本典之教授の会計言語観。
- 6) また井尻は次のようにも述べている。  
「実際、ビジネスは会計の上につくり上げられたのではないであろうか。会計なくしてわれわれの複雑な利害

関係をどうして互いに結びつけることができるのであろうか。」(223頁)

「複式簿記のほんとうの重要性はその構造の美しさにあるのではなく、その構造が財産変動における原因結果の関係を追求するようわれわれに強制しわれわれのものの考え方に影響を及ぼすという点にある……。」(140頁)

- 7) <数>概念の展開の歴史のひとつに会計の歴史があると思われるが、ここではこの点には深入りしない。とくに、ゼロの発見、位取り記数法、インド数学とアラビアの学問・文化の出会い、十字軍の侵攻、交易の発展、フィボナッチによる西洋への紹介、金融業の発展、グーテンベルクの活版印刷、ルカ・パチオリによる書物の出版等々、複式簿記の生成史にかかわる問題としてリトルトンらによって論じられてきたことを、それらをとらえる人間の『認識の型』という面から、西洋以外の数学史も含めて再考する必要がある。
- 8) このあたりの論点については、笠井昭次教授が、インプット理論・過程理論・アウトプット理論の問題として詳細に論じられている。なお、笠井は、記録体系としての諸会計構造論を、みつつのレベルから分類・整理する視軸(枠組み)を提示された。勘定機構上の関連(構文論)の点から、インプット理論・アウトプット理論・過程理論を、対象把握ないし構成の方法(意味論)の点から、均衡体系思考・非均衡体系思考を、そして計算目的(語用論)の点から、財産計算体系・損益計算体系・在高計算体系・資本計算体系を分別された。これらの分類メルクマールの組み合わせによって、各会計構造論の位置付けが規定されることになる[笠井昭次、55-87頁]。
- 9) これを論理学の視点から語るとすると、フレーゲ流かパース流かによりとらえ方が異なる。その本質はどこにあるかということ、人間というものを捨象した客観が成立するとみるか(フレーゲ) 否か(パース) による。

## <参考文献>

Alfred W. Crosby, *The Measure of Reality—Quantification and Western Society, 1250-1600—*, Cambridge University Press, 1977. (アルフレッド・W. クロスビー、小沢千重子訳『数値化革命—ヨーロッパ覇権をもたらした世界観の誕生—』紀伊国屋書店、2003年。)

Karl Polanyi, *The Great Transformation—The political and Economic Origins of Our Time—*, Beacon Press, 1957. (原著第一版は、Rinehart, 1944) (カール・ポラニー、吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉本芳美訳『大転換—市場社会の形成と崩壊—』東洋経済新報社、1975年。)

——, *The Livelihood of Man*, Academic Press, Inc., New York, 1977. (K・ポラニー、玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の経済Ⅰ—市場社会の虚構性—』・『人間の経済Ⅱ—交易・貨幣および市場の出現—』岩波書店、1980年。)

——, *Dahomey and the Slave Trade—An Analysis of an Archaic Economy—*, University of Washington Press, 1966. (カール・ポラニー、栗本慎一郎・端信

行訳『経済と文明—《ダホメと奴隷貿易》の経済人類学的分析—』サイマル出版会、1975年。)

Marcel Mauss, *Sociologie et Anthropologie*, Universitaires de France, 1968. (M.モース、有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳『社会学と人類学Ⅰ』弘文堂、1973年。M.モース、有地亨・山口俊夫訳『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂、1976年。)

Michael Polanyi, *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London, 1966. (マイケル・ポラニー、佐藤敬三訳、伊東俊太郎『暗黙知の次元』紀伊国屋書店、1980年。)

青柳文司『会計物語と時間—パラダイム再生—』多賀出版、1998年。

井尻雄士『会計測定の基礎』東洋経済新報社、1968年。

W.ゾンバルト、岡崎次郎訳『近世資本主義』生活社、1942-43年。

——、梶山力訳『高度資本主義』有斐閣、1940年。

笠井昭次『会計の統合の系譜—会計構造論の類型論的体系化—』慶應義塾大学商学会 商学研究叢書17、慶應通信、1989年。

カール・ポラニー、玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史—ポラニー経済学のエッセンス—』日本経済新聞社、1975年。

河上哲作編『認知言語学の基礎』研究社、1996年。

栗本慎一郎『経済人類学と記号論—機能記号から一般記号へ—』川本茂男・田島節夫・坂本百大・川野洋・磯谷孝『日常と行動の記号論 講座・記号論4』勁草書房、1982年。

三枝博音編『三浦梅園集』岩波書店、1953年。

戸田武雄『ウェーバーとゾンバルト』日本評論社、1949年。

西田幾多郎『場所・私と汝』『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』岩波書店、1987年。

野村益寛『認知言語学』辻幸夫編『ことばの認知科学事典』大修館書店、132-146頁、2001年。

ブライアン・ロトマン、西野嘉章訳『ゼロの記号論—無が意味するもの—』岩波書店、1991年。

見田宗介・上野千鶴子・内田隆三・佐藤健二・吉見俊哉・大澤真幸編集『社会学文献事典』弘文堂、1998年。

マックス・ヴェーバー、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989年。

大和雅之「第12章 実在、階層、認知、発見、そして社会—自然科学と経済人類学」栗本慎一郎編著『経済人類学を学ぶ』有斐閣、1995年。

山梨正明『認知言語学原理』くろしお出版、2002年。

吉村公宏『はじめての認知言語学』研究社、2004年。

## <謝辞>

本稿は、KLC(京都大学大学院 人間・環境研究所 山梨正明先生の研究室)の研究会(2005年1月29日)における、宮原勇先生(愛知県立大学)の御発表(「認知言語学と哲学—認知言語学は存在をどのように捉えるか—」)に強い示唆を受けている。ここに記して感謝申し上げます。